変わる日本の「暮らし」と「まち」

団地を舞台に、さまざまな世代が生き生きと暮らせるまちをつくる

千葉市・千葉幸町団地
地域医療福祉拠点化
（2016年●平成28年～）

阿部民子 text by Tamiko Abe

illustration：Shigeyuki Sakata

幕張新都心を擁する千葉市美浜区にある千葉幸町団地。賃貸が4287戸、分譲1240戸、総戸数はじつに5500戸を上回る。多くの団地がある千葉市のなかでも有数のマンモス団地だ。

8月、この団地でユニークな催しが開かれた。題して「2019千葉幸町サマーカレッジ」。団地をはじめとする地域の子どもたちに楽しんでもらうことだけでなく、子育て世帯（特に共稼ぎ世帯）への支援の一環として、UR都市機構とURコミュニティ、日本総合住生活のURグループ3社が開催したもので、日本将棋連盟のプロ棋士らによる「UR将棋教室」や工作教室「こどもワークショップ」、千葉大生による「千葉大『夏休み科学実験Week』」と楽しいプログラムが相次いだ。

取材に訪れた日は、千葉大生が講師を務める「発泡スチロールスタンプを作ろう！」という科学実験の真っ最中。冷房の効いた集会所で、15人ほどの小学生や未就学児がレモンやオレンジなどの食材で発泡スチロールを溶かし、スタンプ作り。優しい大学生の説明に「わー、溶けた！」「ハートのスタンプを作ったよ」と好奇心いっぱいで楽しんでいる。

インドネシアからご主人の千葉大留学で来日、この団地に住んで2年になるというローマさんは、同国のお友達と子ども4人を連れて参加。「夏休みにこういう催しをやるのはすごくいいですね。新しい知識や経験も増えて、子どもたちもすごく楽しんでいます」と、笑顔で話してくれた。

大学生たちと一緒に「科学実験」で一生懸命な子供たち。
野外ではキッチンカーが出てワイワイ。

高齢者福祉総合施設を誘致

千葉幸町団地が誕生したのは、日本の高度成長期である1969年。緑や公園に恵まれた環境、周囲にはスーパーマーケットやファミリーレストランがあり、京成千葉線やJR総武線などへもアクセスが便利とあって、長く住み続ける人も多い。地区内には図書館や公民館、小学校や中学校、保育所や幼稚園もあり、子育て世帯への配慮も万全だ。

そうした多様な世代が、住み慣れたまちでずっと暮らし続けられるようにと、URは千葉幸町団地で地域医療福祉拠点化に着手。高齢者や子育て世帯等に配慮したまちづくり推進のために、さまざまな取り組みを進めている。今回のサマーカレッジもそうした活動の一環だ。

その象徴ともいえるのが、2014年に全施設がオープンした高齢者福祉総合施設「美浜しょうじゅタウン」だ。団地の再生にあたり、特別養護老人ホームとサービス付き高齢者向け住宅、透析治療を専門とするクリニックを誘致。さらに同施設には、小規模多機能型居宅介護事業所や定期巡回・随時対応型訪問介護事業所、「子育てリラックス館」、地域交流スペースやカフェも設けるなど、医療と福祉、介護の総合的な拠点となっている。

URの地域医療福祉拠点化の先端をいく施設として、他の団地などからの見学も絶えないというが、誘致当初は現場に戸惑いもあったという。

「施設は誘致したものの、団地としてのケアシステムをどうやってまとめていくか、地域をどう活性化するのかなどのとりまとめができておらず、それぞれがバラバラに動いている状態でした。それらの接着剤的な役割を果たしたのがURです」と語るのは、UR団地マネージャーの山口和人だ。

URの声掛けによって2016年に「幸町二丁目連携会議」が発足。地元行政や社会福祉協議会、地域包括支援センター、介護事業者や診療所、団地自治会、子育て施設、URなどの関係者が定期的に集まり、地域の高齢者などのさまざまな問題や情報を交換。連携して助け合う仕組みができあがっていった。

URはまた、千葉市と「まちづくりに関する包括的な連携協定」を締結し、千葉市とともに高齢者や子育て世帯に配慮したまちづくりを推進。また、千葉大とも多文化共生の推進に関して連携し、団地の七夕祭りに留学生を招いて団地住民との交流を図るなどの試みも始まっている。

誰もが安心して暮らせるまち

URは現在、少子高齢化に備え、千葉幸町団地をはじめとする、団地の地域医療福祉拠点化を推進している。2025年度までに150団地の拠点化を目指し、多様な世代が生き生きと暮らし続けられる住まい・まち〈ミクストコミュニティ〉づくりに力を注いでいるのだ。

さまざまな制度やサービスのなかでも特に住民の評判が高いのが、生活支援アドバイザーの存在だ。生活全般に関わるさまざまな相談に対応するほか、高齢者の団地住民に定期的に電話をする「あんしんコール」、健康体操やフラワーアレンジメントなど趣味のイベントも開催している。団地マネージャーの山口も「生活支援アドバイザーは高齢者一人ひとりの名前と顔を覚え、常に心配事がないかお声かけをし、何かあるとすぐに駆けつける。使命感を持って取り組んでいて、住民の方々も非常に信頼しています」と感服する。

ほかにも、高齢者が安全に住み続けられるよう整備した「健康寿命サポート住宅」や、子育て経験を持つURの若手女性職員がアイデアを出した「子育て世帯向け住宅」など、多彩な試みを行っている。

サマーカレッジに3人のお子さんと参加していた片岡麻美さんは「公園や子育てリラックス館でお友達ができますし、フレンドリーなおじいちゃん、おばあちゃんがいらっしゃるから、買い物や散歩をしていても、よく声をかけていただきます。地域全体で子どもを守っている気がして、安心して子育てができますね」と話してくれた。

サマーカレッジの最後には、大きな模造紙に描いた木に子どもたちが作ったスタンプを押して完成。色とりどりのスタンプで彩られた大樹のように、団地を舞台に、多様な世代の新しい暮らしが花開き始めている。

街に、ルネッサンス
UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社